◆表紙さまざま　十七史（解説八ページ）

蓬古

HÔSA

名古屋市蓬左文庫

NO. 54

HÔSA LIBRARY, CITY OF NAGOYA

展示室

# 歴史を語る書物

一、中国の歴史書
　四月二十日～五月十五日
　五月十八日～六月十六日
二、歴史物語
　七月十三日～八月十四日
　八月十七日～九月十五日

平成八年度の蓬左文庫の展示は、「歴史を語る書物」と題し、中国の正史や日本の官選国史から歴史に取材した読み物、日記まで、四つのテーマで、歴史に関わる書物をご紹介します。

**◆中国の歴史書**

中国は、もっとも歴史書の多い国といわれます。中国の伝統的な書物の分類法である四部分類でも、経（儒学）史（歴史）子（諸学）集（合集・総集など）のように、歴史は、史部として、四書五経を中心とした経部とならんで一部を占めています。

この膨大な中国の歴史書は、『春秋左氏伝』と『史記』の二つの書物から出発しているといわれます。『春秋左氏伝』は、五経の一つ『春秋』の注釈書です。『春秋』は、魯の国の紀元前八世紀～五世紀までの年代記に、孔子が儒教の立場から道徳的解釈を加えたものと伝えられ、後世多くの注釈書が作られています。その代表的なもののひとつが『春秋左氏伝』で、とくに歴史的な立場に立って、豊富な資料を駆使して、紀元前二世紀頃までに書かれたものです。一方、『史記』は、前漢時代の思想家司馬遷（紀元前一四五？～九〇？）によるもので、中国の伝説時代から、前漢時代の初期紀元前二世紀頃までを記述したものです。

この二書は、記述の形式に違いがあり、『春秋左氏伝』が、年月を追って事件を記す編年体という歴史記述としては、オーソドックスな方法を採っているのに対して、『史記』の方は、年代順に天子の伝記と国家の重大事件を記した「本紀」と、臣下の伝記と周辺諸外国の記事からなる「列伝」を中心とした紀伝体という形式で記述されています。この司馬遷が採用した方式は、前漢時代を記述した『漢書』がこれに倣ったのをはじめとして、以来『明史』まで、左表に一覧した歴代王朝の二十四の「正史」すべてが採用しており、中国における歴史記述の主流は、紀伝体となりました。

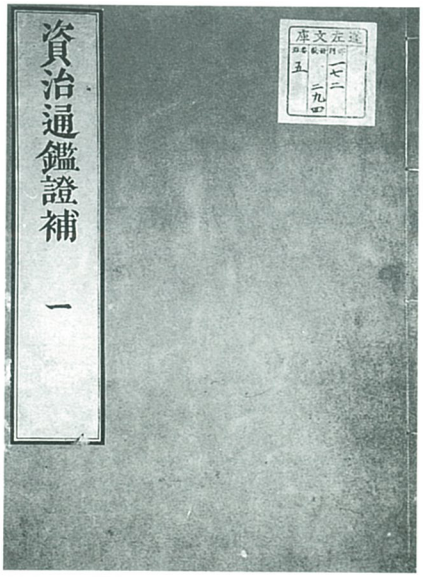
編年体の歴史書は、唐時代を境にあまり盛行しなくなりますが、宋の時代に書かれた長大な編年史『資治通鑑』は、豊富な資料と考証に基づいた歴史書として高く評価されています。北宋の司馬光（一〇一九～一〇八六）が多くの学者の協力を得て一九年の歳月をもって完成したもので、紀元前四〇三から九五九年まで一三六二年間にわたる通史です。

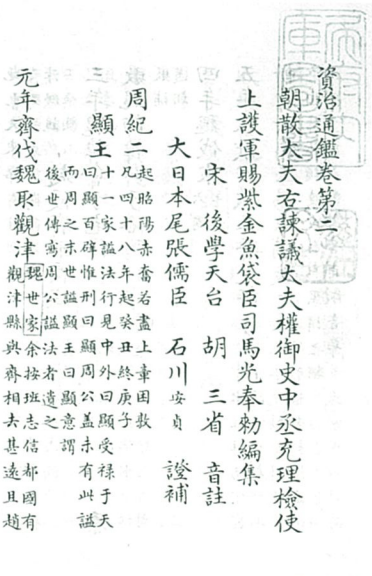
このような正史や通史のほかにも、『通典』『文献通考』などの中国諸王朝の制度の沿革を歴史的に通観した書物や、中国初、世界的にも最古の史論とい

「二十四史」一覧

| 書名 | 巻数 | 編者 | 成立年代 |
|---|---|---|---|
| 史記 | 120巻 | 司馬遷 | 紀元前2世紀 |
| 漢書 | 120巻 | 班固 | 1世紀 |
| 後漢書 | 120巻 | 范曄 | 5世紀 |
| 三国志 | 65巻 | 陳寿 | 3世紀 |
| 晋書 | 130巻 | 房玄齢 | 7世紀 |
| 宋書 | 100巻 | 沈約 | 5世紀 |
| 南斉書 | 59巻 | 蕭子顕 | 6世紀 |
| 梁書 | 56巻 | 姚思廉 | 7世紀 |
| 陳書 | 36巻 | 姚思廉 | 7世紀 |
| 後魏書 | 114巻 | 魏収 | 6世紀 |
| 北斉書 | 50巻 | 李百薬 | 7世紀 |
| 周書 | 50巻 | 令狐徳棻 | 7世紀 |
| 隋書 | 85巻 | 魏徵 | 7世紀 |
| 南史 | 80巻 | 李延寿 | 7世紀 |
| 北史 | 100巻 | 李延寿 | 7世紀 |
| 旧唐書 | 200巻 | 劉昫 | 10世紀 |
| 新唐書 | 225巻 | 欧陽修 | 11世紀 |
| 旧五代史 | 152巻 | 薛居正 | 10世紀 |
| 新五代史 | 75巻 | 欧陽修 | 11世紀 |
| 宋史 | 496巻 | 托克托 | 14世紀 |
| 遼史 | 116巻 | 托克托 | 14世紀 |
| 金史 | 135巻 | 托克托 | 14世紀 |
| 元史 | 210巻 | 宋濂 | 14世紀 |
| 明史 | 336巻 | 張廷玉 | 17・8世紀 |

※「二十四史」とは、清朝の乾隆年間（1736～95）に選定した歴代王朝の正史二十四編の総称。「欽定二十四史」ともいう。右の内、『旧唐書』『旧五代史』および宋史以下の五史を除いたものを『十七史』、『旧唐書』『旧五代史』および明史を除いたものを『二十一史』といい、正史の総称としては、『新元史』を加えて「二十五史」ということもある。




資治通鑑証補　294冊
石川安貞編（28.5×20.3cm）

われる七世紀に著された『史通』をはじめとして、中国には、歴史の事実を批判的に記述した史論にも多くの優れた書物があります。

こうした歴史書は、我が国の歴史編纂の手本となったことはもちろんですが、為政者や知識階級は、常に中国の歴史から多くを学ぼうとしていましたから、中国の歴史書の収集に熱心でした。尾張藩の御文庫にも多くの中国の歴史書が収集されています。

さらに、尾張藩では、九代藩主宗睦の命により、中国の歴史書の比較、再編集が行われました。実際にこの仕事を行ったのは、石川安貞（一七三六～一八一〇）で、最初に、中国の『宋史』から『明史』まで「五史」についての作業が始められ、寛政二年（一七九〇）、『資治五史要覧』が完成しました。ついで命ぜられた『資治通鑑』をもとにした「五史」より前の「十七史」についての編集は、養子の嘉貞（一七七一～一八四一）とともに二代にわたる仕事となりました。こちらは、全二百九十四冊におよぶ『資治通鑑証補』として完成し、『資治五史要覧』とともに、現在も蓬左文庫に伝えられています。

**◆歴史物語**

ここでは、『栄華物語』や『大鏡』などの文学史でいうところ歴史物語だけでなく、これらをも含めて、歴史的な事柄を題材、背景とした作品全体を対称としてとり上げます。

もっとも人気のある中国の歴史小説は、『三国志』と『水滸伝』で、我が国でもよく知られています。『三国志』は、三世紀前半の中国、魏・呉・蜀三国の歴史に取材したもので、魏の曹操や蜀の玄徳・関羽・張飛の三傑、諸葛孔明等が活躍し、『水滸伝』は、十二世紀の宋時代末期に起こった内乱を題材に一〇八人におよぶ好漢が次々に登場します。いずれも、現在の形になるのは、元時代末から明時代の初頭、一四世紀のことですが、すでにずっと以前から、人々の間で語り継がれ、やがて講釈や芝居の題材となることによって、社会の中に浸透し、読み物としての原型がつくられていったものです。そこに登場する英雄達の姿は、中国の人々が望んだ姿でもあったといえます。

一方、我が国では、心理描写に重点を置いた仮名文字による物語文学が発達し、歴史叙述においても漢文体で書かれた中国風の歴史書に対して、仮名書きによって、歴史の諸相をいっそう生き生きと表現しようとした作品が生まれました。これが、藤原氏の栄華を描いた『栄華物語』や『大鏡』などで、いわゆる狭義の「歴史物語」と呼ばれるものです。一方、この「歴史物語」が、いずれも朝廷を中心とする貴族社会を描いたのに対して、武士が新勢力として台頭してくると、彼らを主人公に、戦乱の時代を描いた「軍記物語」が、数多く作られました。その代表が、武士が勢力をのばす契機となった戦乱を描いた『保元・平治物語』であり、琵琶法師の「祇園精舎の鐘の声」の有名な語り口ではじまり、源平両氏の盛衰、興亡を叙述した『平家物語』などです。

「軍記物語」は、平安時代末期から鎌倉時代を経て、南北朝時代に至る変動期の社会、時代相を題材にしていることからそこには、多種多様な人間像が描かれています。中国における『三国志』『水滸伝』同様、謡曲や芝居によって、社会の中に浸透し、義経、弁慶、曾我兄弟など多くの国民的英雄が生まれました。江戸時代初期の出版文化草創期には、軍記物語が盛んに刊行されています。

さらに、江戸時代の庶民文芸の世界でも、歴史を題材としたものが、数多く登場しています。『水滸伝』を手本に、里見家の八犬士を主人公に壮大な創造の世界を展開する滝沢馬琴の『南総里見八犬伝』、中国宋時代の盗賊を主人公とした『自来也豪傑物語』など、荒唐無稽とも言えるストリーを展開する長編読み物や絵本の世界では、我が国の「軍記物語」の英雄とともに、中国の英雄達も様々に形を変えて、活躍の場があたえられています。

次回展示
歴史を語る書物
三、日本の歴史書　10/5～11/6
四、日記　1/11～2/9　2/22～3/23　11/9～12/8

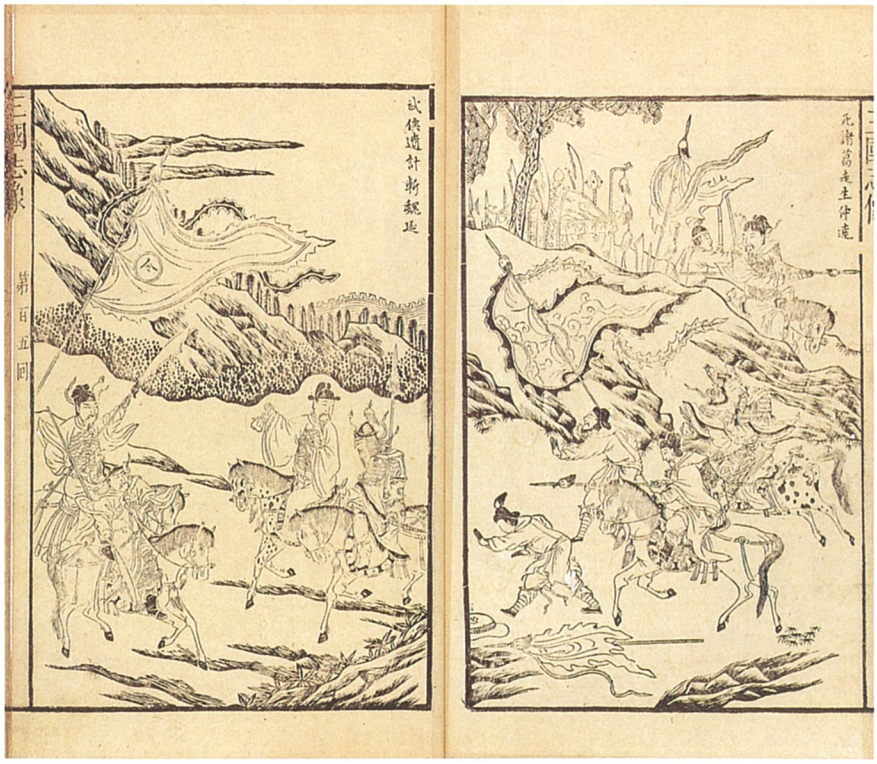
（7頁下段より）

これによると、得義から申し出たのではなく、最初に城代から打診があり、藩側からの発案であることがわかる。手透きの時を利用してというのだから、随分勝手な要求ともとれる。『奥村家歴代勤書』は、年代を追った職務についての記録である。得義が掃除中間頭に転属されたことは記載されているものの、文政四年に名古屋城調査に加わったこと、名古屋城の記録編纂を命ぜられたことは、万延元年のこの添え書きで初めて記載されている。正式な職務として認められていなかったからであろう。さらに得義が、一人では無理ではないかと考えていたことも注目される。結局得義は、結局得義は、説得されてこの膨大な事業に一人で取り組むこととなったのである。

現代の目から見ると強引なやり方でとんでもない大仕事を押しつけたものだともとれるが、これも一つの人材登用の方法であったかと考えられる。名古屋城といえば、尾張藩にとって軍事上、行政上の中枢であり、藩主の居所であり、将軍の宿泊所でもある。当時としては、トップシークレットにかかわる調査を行うことは、藩側の意図が先か本人の意思が先かに拘わらず、人物・能力ともに藩にとっては保証付きの人物であったことには、違いあるまい。天保十五年（一八四四）、得義は、徒格に昇格する。奥村家は三代をもって、代々の相続と五石二人分の禄高が保証された尾張藩士となったのである。

（文責　桐原）

三国志伝通俗演義　　羅本編　12巻6冊　万暦19年（1591）刊　27.5×16.7cm




李卓吾先生批評三国志　　羅本編　120回16冊　明時代（16･17世紀）刊　26.5×16.5cm

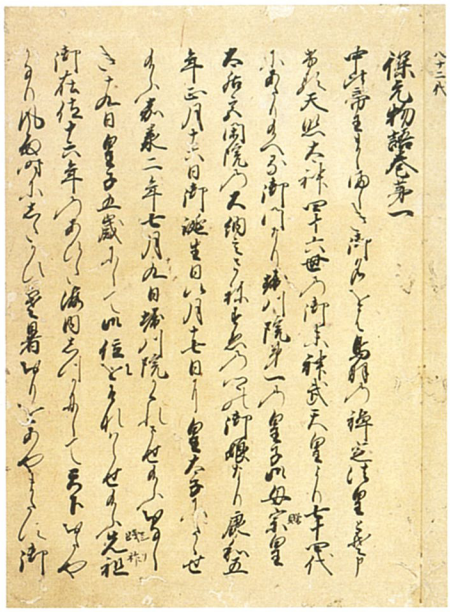
どちらも三世紀前半の中国、魏・呉・蜀三国の歴史書『三国志』に取材した歴史小説『三国志伝通俗演義』の絵本である。三国の歴史物語はすでに唐時代には、講釈の題材となっており、元の時代には、絵本が刊行されている。

作者の羅貫中は、元時代末から明時代初期の人物で、『三国志』を素材に、こうしたすでにある作品などをも参考に、一大長編小説として完成させた。

上は、初代尾張藩主義直が家康の遺品として譲り受けた「駿河御譲本」のひとつ。同版のものは、中国にも伝存の少ない珍しい書物のひとつである。

下は、マテオ・リッチが中国最大の思想家と評した李卓吾（1527～1602）が批評を加えたもの。李卓吾は、戯曲小説などの俗文学に新価値を見出し、ほかにも『水滸伝（すいこでん）』『西廂記（せいしょうき）』の批評本を著している。右側は「死せる諸葛、生ける仲達を走らす」の有名な故事で知られる場面。

保元平治物語（片仮名本）５冊　　慶長年間（1596～1615）写　29×22.3cm




武士が台頭する契機となった保元の乱(1156)、平治の乱(1159)の顛末を描いた軍記物語の写本である。いずれも、初代尾張藩主義直が、父家康の遺品として譲り受けた「駿河御譲本」。

上は、片仮名交じりの本文を持ち、大陸風のデザインの表紙が、珍しい。

下は、平仮名交じりの本文をもち、現存する『保元平治物語』の古写本のなかでも、優れたもののひとつに数えられている。

保元物語　巻第１巻頭
保元平治物語（平仮名本）　５冊の内
慶長年間写　29×22.3cm

# 『金城温古録』を生んだ奥村家の出身と経歴

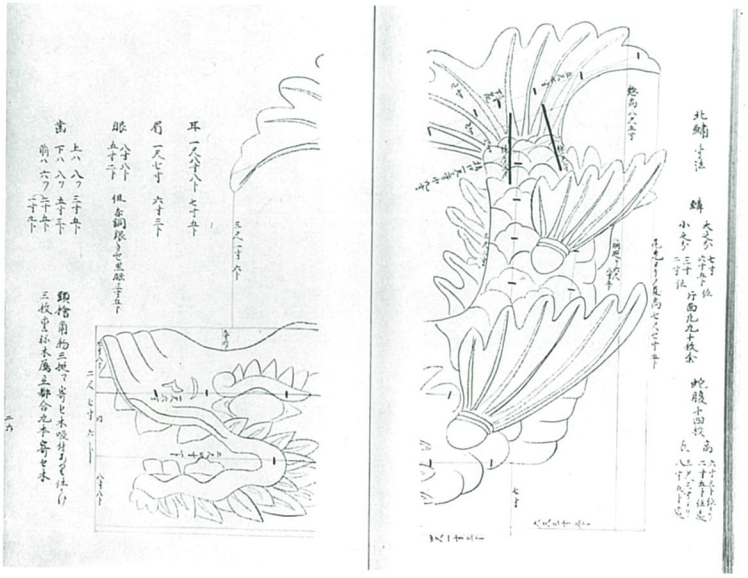
## 奥村得義（徳義）・定家資料の紹介

この度、『金城温古録』の編纂で知られる奥村得義（徳義一七九三～一八六二）・定（一八三六～一九一八）氏を出した奥村家の資料を、御子孫のご厚意により蓬左文庫に寄託していただいた。今回寄託分の資料によって明らかとなった事も多いのでここに紹介する。『金城温古録』は、名古屋城の各部分について、現状、歴史、由来、各部にまつわる諸説等々、実地調査に古文献からの引用を交えた詳細な記録で、現在においても名古屋城に限らず、名古屋の歴史についての基礎資料として重用されているものである。

奥村家は、もともと美濃の出身で、得義の祖父の代に尾張藩に仕えている。名古屋城の調査にかかわったのがきっかけとなって得義だけでも三十年余、養子の定とあわせると七十年に及ぶ労作『金城温古録』の執筆を行うこととなった。

奥村家には、すでに得義の祖父の代から相当数の蔵書があったと思われるが、『金城温古録』執筆により、得義・定の代には、数百冊を越える蔵書を有していたものと推定される。得義の養子で、『金城温古録』編纂の助手を勤めた定は、得義没後編纂を引き継ぎ、廃藩置県後の中断を経て、『金城温古録』全六十五冊の内後半部分の清書を完成させて、明治三十五年に、徳川家に献納している。その定は晩年、名古屋市史の編纂に関わり、市史資料本に多くの家蔵の資料を提供した。この度寄託された資料の中に、名古屋市史編纂時の明治四十二年から大正七年にいたる定の覚書があり、これによると、亡くなる前年の大正六年七月十七日、得義の雑纂『松濤棹筆』八十五冊、尾張藩および名古屋城に関する記録を集めた『国秘録』五十冊はじめ尾張関係の蔵書三百十五冊を尾張徳川家に買い上げてもらい、同時に得義が城代衆から下げ渡されていた名古屋城の絵図を徳川家に献納したと記されている。この三百十五冊と絵図は、昭和十年、東京目白の徳川邸内に徳川黎明会が開設した蓬左文庫の蔵書となり、現在は、名古屋市蓬左文庫と徳川林政史研究所に分蔵されている。さらに御子孫によると、定氏が大正七年に亡くなり、跡継ぎの鉦吉氏が広島へ転居するに際して、蔵書のほとんどを処分することとなった。この時、奥村家蔵書の散逸を惜しんだ名古屋市がその多くを購入したという。この名古屋市の購入分は、当時開館準備で資料を収集していた名古屋市立図書館（現在名古屋市鶴舞中央図書館）の蔵書となり、現在にいたる。この時、処分されたと思われるものでは、東京駒込の（財）東洋文庫に『金城温古録』の草稿本はじめ数件の奥村家旧蔵書が所蔵されており、他にも東京方面の文庫や図書館が所蔵しているものが数点確認されている。

この度寄託をしていただいた資料は、ほとんど奥村家自身に関わる「勤書」「系図」などの資料もしくは、書画や俳句などの作品で、蔵書というよりは家にかかわる記録というべきものである。特に『奥村家歴代勤書』と題された資料には、徳義の祖父・父の勤書にはじまり、徳義・定の勤務に関する詳しい履歴記録が収録されている。これまで、奥村家については、徳義と定の勤書が『藩士名寄』に収録されている以外は、徳義と親交のあった細野要斎（一八一一～七八）の雑纂『感興漫筆』『葎の滴』などから知る以外になかった。奥村家の出身、得義の相続の事情、金城温古録執筆の経緯などについて、この度寄託された資料によって新たにいくつかの点が明らかになった。



金城温古録　天守編図彙部より

### 1、奥村家の出自について

「名古屋叢書続編」に収録された『金城温古録』の解説によると、奥村氏の出身が美濃であること、徳義の祖父仁右衛門元濤が加納の出で、尾張藩に出仕したことは記されているがそれ以上の詳しい記述はない。

『奥村家系譜』によると、奥村家は、戦国時代末期、美濃国中島郡から葉栗郡大佐野村に移り住んだ武士出身と見られる奥村平三郎政員を祖とし、その次男で元和寛永年間頃に、各務郡上戸村に移って分家した奥村甚十郎

正純を得義家の初代とする。この正純の孫の戸右衛門正紹が延宝年間に加納藩主松平丹波守光永に出仕したのが、役所勤めの最初であったようだ。しかし、松平家は丹波守光熙の時、宝永八年山城国淀に転封、奥村家は、長男と次男は松平家とともに淀に移り住んだが、正紹は、三男の園右衛門正勝とともに上戸村に留まり、まもなく、新しい加納藩主安藤対馬守信友に仕えた。この正紹の孫仁右衛門元儔が得義の祖父にあたる。元儔もはじめ安藤家に仕え、宝暦六年、同家の転封によって弟とともに奥州岩城に移ったが、同七年には、美濃に残った母親の病気によって帰国、同八年に、尾張藩に仕えたという。

## 2、得義までのこの家の役職

尾張藩に最初に出仕した得義の祖父仁右衛門元儔は、享保四年（一七一九）生まれ。前記のように、美濃に戻った後、明和四年（一七六七）、尾張藩勘定所の手代に採用されている。同八年までの最初の四年間は、大坂天満屋敷の物書（書記）兼務で、大坂勤めであった。名古屋勤務となってまもなく元方の手代となって二石加増され、その真面目な働きぶりと能力を認められたのか、金銀の出納にかかわる御金場手代となっている。天明三年（一七八三）、既に六十歳を過ぎて、普請方手代に移り、庄内川と五条川の分流工事にかかわっている。天明五年からは、定員外の扱いとなったものの、勘定奉行配下として出仕しているし、寛政二年（一七九〇）には、前述の分流工事の功労により褒賞もうけている。伝右衛門元儔は、寛政五年、七十五歳で没しているが、藩から実務官吏としての能力を高く評価された人物であったものと考えられる。

得義の父にあたる仁兵衛為綱は、宝暦九年（一七五九）の生まれ。安永六年（一七七七）、十八歳で勘定所に見習いとして出仕。天明三年からは、草創期の明倫堂で、給仕や取次の役を勤めた後、寛政六年から、普請方手代の職に就いている。文化四年（一八〇七）から一年は江戸詰め、帰名後は、同八年五十三歳出なくなるまで、普請方手代の職にあった。

文化八年四月、病床にあった為綱は、死を予測して、すでに普請方の見習となっていた息子が自分の死後、藩に召し抱えられることを願って、願書を提出している。死の直前、為綱は枕元に得義を呼んで「自分は、よく勤めたので、今死んで、年数が不足していても、おまえが並手代には召し抱えられるように上司達も配慮してくれるであろう」と述べたという。為綱の勤続年数は、見習期間を除くと二十九年で、自動的に得義が召し抱えられる年数には満たなかったようである。同年六月、得義は、為綱の遺言どおり切米七石五人扶持、普請方手代並で見習から正式に藩士として召し抱えられた。

## 3、得義の職歴と『金城温古録』執筆

得義が、藩から正式に普請方手代並に任命された時、命令を伝えた奉行衆は、得義が若年で、しかも為綱の勤続年数が不足にも拘わらず正式採用となった理由に、父仁兵衛の有能な勤務成績のおかげであることとともに「絵図引受け相認め候段、御役所なくて叶ざる義」として得義の絵図作成の技術が必要であることを揚げている。『金城温古録』に収録された図等から見て、奥村得義は図面作成に優れており、この技術によって、普請方に採用されたものと考えられる。

やがて、同十一年には、吟味方本役となるが、文政三年十二月、城代の支配に属する「掃除中間頭並」に転属するのである。文政年間、十代藩主斉朝（なりとも）の治世には、年寄および城代が中心となって、軍備体制の見直しが行われ、その一環として名古屋城の調査が行われた。その内容は、名古屋城内各所についての古い記録の調査および、測量を中心とするものであったと考えられる。文政四年、この調査に得義も加わることが命ぜられている。前年の暮れに転属した「掃除中間頭」という職は、名古屋城内の堀や通路、林、空き地など屋外施設の管理・清掃・修繕などを行う役職であり、職務上、名古屋城内に自由に出入りできる役職であった。得義の転属は、名古屋城調査のための人材確保の一環であったであろうことは十分考えられるのである。

得義は、この事業にかかわることにより、名古屋城についての記録があまりにも不足していることに気付き、のちに『金城温古録』となる「名古屋城古義」編集に手をそめることとなる。この辺りの経緯については、これまで、『金城温古録』巻頭の自序と細野要斎の『感興漫筆』に収録された安政五年（一八五八）に城代に提出した『金城温古録』編纂の経緯を述べた「上書」の抜き書きによって知られてきた。これらの記述によると、得義自身が名古屋城についての記録編集を城代に願い出、それが認められて、この数十年におよぶ仕事がはじまったとされている。しかし、この度寄託された資料『奥村家歴代勤書』に収録された万延元年（一八六〇）、『金城温古録』提出に添えた書付によれば、次のように記されている。

「――前略――」

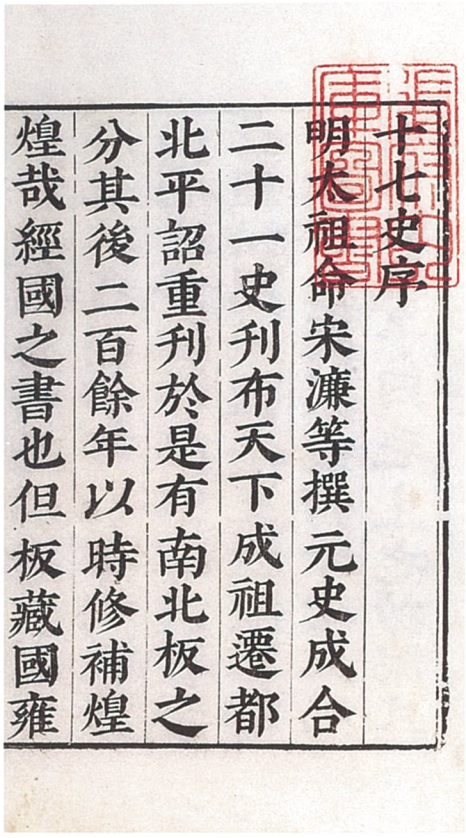
文政四年、名古屋城調査の節、私へも御用を仰せつけられ、御用を勤めていたところ、古い事などは、直ぐにわからないことも多く、後々のために、命令が有れば調査をするかというお尋ねが城代中条多善殿の内意として聞かされた。不調法者であり、且つ直ぐにできることではないが、命令が有れば取りかかってみましょうと申し上げたところ、そのつもりでいてほしい、いよいよの時は、相談するからということであった。同年十一月十九日、城代中条多善殿がおっしゃるには、竹腰山城守殿に名古屋城調査の事を申し上げたところ、後々のため、手透きの時を利用して取り調べるようにと年寄衆からの仰付けがあった。そのように心得るようにと仰せ聞かされた。追って十二月二十二日には、大きな仕事であるので一人では行き届かないであろう事を城代小笠原三九郎殿の御付のものから伝えてもらったが、さしあたってこの仕事をやり遂げる志のある者が他に思い当たらないので、なおのこと怠りなくやり遂げるよう心がけて欲しいと懇ろに仰せ聞された。

――後略――」

（3頁下段につづく）

◆表紙さまざま（表紙口絵解説）

## 十七史




『十七史』 1594巻　268冊
明時代末～清時代初期（17世紀前半）刊
29.1×18.7cm

黄色の綾絹を使用した表紙、絹を貼った題簽に標題を墨書している。中国の書物は、紙の規格の違いから、日本の書物に比べて縦にながく、また、綴じ目の横幅を大きくとっている。この黄色、日本の色でいえば、「鬱金色」ということになろうか。表紙の写真では、見えないが、綴じ目側の上下の角を包む「花布」の絹の濃緑との組み合わせや縦長の表紙や題簽の形の効果もあって、いかにも中国風の装いである。中国で黄色は、中央・大地を表し、皇帝の着る衣服の色でもある。

蓬左文庫には、中国の書物が数多く伝えられているがこれほど贅沢な装幀は珍しい。とくに本書の場合は、二百六十八冊揃いである。

表紙には、各冊の収録内容を記した目録が貼り付けられていたらしい正方形の糊跡がある。また一部は、ほとんど同色だが、紋様の異なる明らかに日本製と推定される絹が使用されている部分もある。後世の補修によるものであろう。

「十七史」とは、中国古代の治乱興亡を描いた司馬遷の『史記』に『漢書』から『五代史』にいたる十世紀までの歴代王朝の正史をあわせた十七の史書の総称である。

この十七の史書が『十七史』としてまとめて刊行されたのは、明時代の末、蔵書家で、多くの書物の校定出版で知られる毛晋（一五九八～一六五九）の汲古閣によるもので、毛刻本、汲古閣本とも呼ばれた。

本書は、この毛刻本。とくに印刷に定評があるが、本書も上質の白色の唐紙に、くっきりと鮮やかな墨色の活字が目をひく。この『十七史』は、後々まで広く世に流布していて、実用向きの並製本や後刷り本のセットも多い。当文庫にも二種の後刷り、並製本のセットがあるが、紙、刷り、装幀いずれも雲泥の差である。

写真のように、巻頭に「張府内庫図書」の朱印がある。尾張藩の内庫つまり藩主専用の書庫に納められていたものである。

蓬左文庫は、蔵書点検のため下記のように休館させていただきます。

期間　平成８年６月18日（火）～６月30日（日）


**名古屋市蓬左文庫**

〒461 名古屋市東区徳川町1001
☎(052) 935－2173


◆交通
名古屋駅、栄より
市バス（基幹バス２番）・名鉄バス（「本地ヶ原方面」行）
「新出来」下車、徒歩５分
大曽根より
ＪＲ中央線「大曽根」下車、南口より徒歩10分

**開館時間**　午前９時30分～午後５時
**休館日**　毎月曜日、第３金曜日
祝日（日曜、月曜のいずれかに重なる場合は、日曜開館、月、火休館）
特別整理期間（２週間）
年末年始（12月28日～１月４日）
**閲覧**　館内のみ。館外貸し出しはいたしません。
**閲覧時間**　閉架図書　午前９時30分～12時
午後１時～５時
開架図書　午後９時30分～午後５時
**複写サービス**　保存上支障のないものについて、マイクロフィルム複写などの方法により行います。
電話・郵送による申込みも可。
**取扱い時間**　午前９時30分～12時　午後１時～５時
**展示**　30件程度の所蔵資料を随時展示。テーマ、期間、回数は、年度により異なります。


「蓬左」第54号　☆平成８年４月20日発行　☆編集・発行：名古屋市蓬左文庫（東区徳川町1001番地）
☆無料　☆不定期刊行　☆印刷：大同印刷株式会社（東区泉２－３－18）